

国語教育 相談室

中学校

NO.54

国語教育相談室
No.54

光村図書

中学校 国語教育相談室 通巻No.119 定価126円(税込)

2008(平成20)年1月15日発行

発行人=常田 寛

発行所=光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話03-3493-2111

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp

印刷所=村田印刷工業株式会社

デザイン=秋葉 幹司

特集

日常の中で生きる言葉

提言 自分との対話のこと 宮地裕

— 今、言葉について思うこと — 宇多喜代子 加賀美幸子

巻頭エッセイ

短歌という宝石 栗木京子



教師力講座 生徒のひと言ひと言を受け止めて、受け流す

教材の径 文学教材研究における観点のもち方

豊かな書写指導のために

光村図書

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
くわしくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>
広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

探検！言葉の森③

「おビール」のなぞ 森山卓郎

2

巻頭エッセイ 言葉と向き合う 短歌という宝石 栗木京子



特集

日常の中で生きる言葉

4

提言 自分との対話のこと 宮地裕

6

実践提案① 言葉・ふしぎ発見！ 新しい指導を考える会

実践提案② 地域の人々へのインタビューで言葉の力をつける 新しい指導を考える会

10

教科書教材執筆より ー今、言葉について思うことー

雨の名 風の名 宇多喜代子

心豊かな言葉 加賀美幸子

教師力講座②

生徒のひと言ひと言を受け止めて、受け流す 甲斐利恵子

14

安居總子の国語教室 ⑦ (最終回)

16

問われる教師力 2 安居總子

教材の径 2

18

文学教材研究における観点のもち方 松野洋人



豊かな書写 指導のために

新しい書写実践の試み⑥

20

動きの中から行書の特徴をつかむ 新しい指導を考える会

書写が目ざすもの⑳

22

中学校国語科書写の大きな飛躍を 宮澤正明

実践レポート

24

「国語デジタル教科書」を活用した古典の実践 東京都日野市立平山中学校

探検！言葉の森③

京都教育大学教授

森山卓郎



「おビール」のなぞ

「おビール」という言葉は、おもしろい。「お」は、ふつう外来語には付かないからである。例えば「おワイン」「おウイスキー」などとは言わない。「おコーラ」なんて言うとなぜ怒られそう。それなのに「おビール」だけはふつうに言うのである。

手始めに、「こ」と「お」の使い分けはといえば、「御研究、御旅行、御母上様、御手もと」などのように、下に続く語が漢語なら「こ」、和語なら「お」となっている。もっとも、あとに続く言葉が漢語なのに「お」を使うこともある。「御誕生日」「御歳暮」などがそうだが、本来は漢語でも、ふだんよく使っていると、身近な和語のように

感じられるのだろう。「ビール」は本来外来語だが、身近な語として、あたかも和語のような扱いになっていくといえる。敬語を使う場面でこの言葉がよく出てくるということもあるかもしれない。

では、用法はどうか。実は、「おビール」の用法も、これまでなかなか豪勢である。三種類、ありそうなのだ。

まず一つめに、「先生のおビールがぬるくなつてしまった。」なんて言うのと、持ち主の「先生」を高めているように思える。そうするとこれは「尊敬語」だ。例えば、「先生のおかばん」「お客様のお車」などという場合の「お」は、その持ち主を高める尊敬語だが、それと同じである。

しかし、相手にビールをつぐときはどうだろう。「先生に心を込めておビールをおつぎする。」などと言えば、「先生」は持ち主ではなく受け取り手と言える。ちょうど、「先生へお送りするお手紙」というのと同じである。だとすれば、これは謙讓語だということになる。

一方、もう一つ「美化語」というものもある。例えば「お正月」「お茶」などの「お」は、持ち主や受け取り手のことを高めているわけではない。こつこつ、美しく言う

だけの働きしかない敬語を「美化語」と言う。おもしろいことに「お酒」は、自分が飲むのでも「私のお酒」と言える。同様の用法で、もし「私のおビール、少しこぼしてしまいました。」などと言えるところなら、この「お」は誰に対する敬意でもないのだ、美化語ということになる。「ビール」より「おビール」の方が上品という扱いだ。うーむ、「おビール」は深い。ちと飲みながら考えたくなりますな。

しかし、ビールは高い。発泡酒の方が安い。というわけで、発泡酒に「御」をつけるのと「発泡酒」になるかといえば、これは言わない。発泡酒の値段が比較的安いからではなくて、今のところ、「発泡酒」という言葉を敬語を使って言う機会が少ないからだろう。みんなが言うようになれば「おビール」のように「こ発泡酒」という表現が一般化する可能性はある。ん？「おビール」の類推でいえば、「こ発泡酒」でなく「お発泡酒」？



短歌という宝石

歌人 栗木 京子

短歌はまことに不思議な表現形式である。万葉集の成立は八世紀半ばとされているが、日本最古のこの歌集にすでに短歌は登場する。もともと、この時代は長歌（五音と七音）の組み合わせを二回以上繰り返し、最後を五七七で結ぶ形が主流で、短歌（五七七）は長歌の後ろに添え物として置かれるだけであつた。短歌が表舞台に躍り出るのは平安時代になつてから。古今和歌集をはじめとするさまざまな勅撰和歌集が編まれ、そこに収められた歌の数々はやがて日本人の美意識の基盤となつていった。

明治時代や敗戦直後の昭和二十年代など、時代の変わりめに「短歌は古臭い」「短歌は片言にしかすぎない」といった滅亡論が湧き上がるのだが、それでもなぜか押しつぶされてしまうことなく、現在まで生き残っている。

万葉集の昔から数えて千数百年。三十一音のちっぽけな形式のどこにそんなしぶとさがあるのだろう。考えるほどに不可解な気持ちになつてくる。

ただ、不可解ながらも私なりに生き残りの理由を考えてみると、まず思い当たるのが短歌のリズムのことである。

短歌は五音と七音の繰り返しで成り立っているのだが、五音と七音のリズムは日本語ととても相性がよい。現在でも、標語やキャッチフレーズなど語感がのびやかでつい口ずさんでしまう表現は五音と七音の組み合わせであることが多い。

飛び出すな車は急にとまれない
お出掛けはひと声かけて鍵かけて
注意一秒けが一生

たとえばこれらの標語は五音と七音で出来

ている。三つめにあげた標語を聞くと、じつは私は次の自作を思い浮かべるのである。

観覧車回れよ回れ想ひ出は
君には一日我には一生

有難いことに教科書にもたびたび採り上げてもらっている歌である。「注意一秒」の標語と「観覧車」の短歌の下句を比べてみよう。

注意一秒／けが一生
君には一日／我には一生

どちらもなかなかきれいな対称形を成している。すべての標語や短歌が対称性を持てばよいというわけではないが、五音と七音の織り成すしらべはとてもリズムミカルなので、繰り返しや対句と自然に融合する特徴がある。やや大げさに言えば、日本人のDNAは呼吸したり歩行したりするように、短歌のリズムと親和性を持つのである。

ところで、自歌自讃のようで恐縮だが観覧車の歌について少しだけ解説を付けさせてもらいたい。それは「君には一日我には一生」のところで「一日」に「ひとひ」、「一生」に「ひとよ」とルビを振ったことである。「いちにち」「いっしょう」と読んでも意味の上では問題ないのだが、作者としてはここは何としても「ひとひ」「ひとよ」のなめらかな語感を大切にしたい。大切にしたかった。「ひとひ」と「ひとよ」。たった一音の差が一日と一生という大きな隔たりを生む。そのダイナミズムは、三十一音の小さな空間だからいっそう際立ってくる。

私の大好きな短歌に、

あぢさるの藍のつゆけき花ありぬ

ぬばたまの夜あかねさす昼 佐藤佐太郎
がある。みずみずしい藍色のあじさいが咲いている、夜も昼も。それだけを表している歌だが、シンプルな中に豊かな味わいを持っている。声に出して読み上げるとなおさら。アの音を母音に持つ語が多く用いられていることに拠るのだろう。さらに、「ぬばたまの」「あかねさす」という表現に注目したい。いずれも枕詞である。枕詞は万葉集以来の伝統を持つ修辭法で、決められた言葉に付いて独特のニュアンスをもたらす。引用歌の場合は

「ぬばたまの」が「夜」に掛かる枕詞で、「あかねさす」は「昼」に掛かる枕詞。たとえば枕詞「あかねさす」は昼のほかにも「日」や「むらさき」にも掛かる。それゆえ、「あかねさす」と聞いただけで、

あかねさす紫野行き標野行き
野守は見ずや君が袖振る 額田王

万葉の時代の女性歌人の恋歌をふつと思いつき出させるところがある。すると、目の前のあじさいの花が何やら万葉人の化身のように感じられて、かぐわしい気持ちになる。

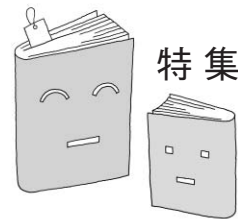
もちろん、古典の知識がなくても短歌の解釈に差し支えないのだが、歴史を知れば知るほどより深い鑑賞ができる。それが長い伝統を有する短歌ならではの醍醐味と言えよう。

明治の末から昭和にかけて歌人、詩人として活躍した北原白秋は歌集『桐の花』に収めた散文の中で、「短歌は一個の小さい緑の古宝玉である」と記している。エメラルド色の小さな古い宝石。それが短歌なのだという。じつに美しい定義付けである。歳月の波に磨かれて輝きを増す宝石。これからもこの不思議な古宝玉を大切にしてゆきたいと思う。



栗木 京子（くりき きょうこ）

1954年愛知県生まれ。京都大学卒業。高安国世に師事。2002年短歌研究賞。歌集『夏のうしろ』により、2003年若山牧水賞。2004年読売文学賞。歌集『けむり水晶』により、2007年遼空賞、芸術選奨文部科学大臣賞。歌誌『塔』選者。ほかに歌集『水惑星』、『中庭』、『万葉の月』などがある。



日常の中で 生きる言葉

提言 自分との対話のこと

大阪大学名誉教授
宮地 裕

学習でも生活でも、言葉というものは、吐く息・吸う息、人の一生のことである。ほかの人の言葉でも、時として、自分にとっての生涯の珠玉となる（二年第七單元「胸の底の人と言葉たち」）。人は毎日自分の中の自分と対話している。考えるということは、そういうことなのだから、と思う。考えることが、その人のなかに、なにものかを蓄積する。書き残された言葉は、その思いの軌跡であろう。

こんな詩が手許にある。一つは十二節一連、もう一つは四節一連で、いずれも五七調（一部分七五調）の文語詩という時代ものだが、戦後間もない昭和二年・三年の春、一高寮歌（注）として残したものである。読んでいたくのも恐縮だが、来しかた行く末を思った若い時の言葉を許していただくとして、それぞれの一部を引く。一つは、

「敗れにし 国に聳ゆる 富士の嶺の 雪をあはれみ かへり来ん 友は幾人」（第十節）
「丘ならで 誰か抱かん 去りましし 純きみ魂を 傷つきし 若き心を」（第十一節）

この詩については、たまたま斉藤茂吉が読んで好感をもってくれたという記録がある（『茂吉随聞（十八）』田中隆尚／『ももんが』昭和三十三年六月初出）。

もう一つは、
「りよりりようと 笛吹けや友 愛しきは 追はじと言ひし
君のみは 寒空を截り 雄心の 調べ鳴らさん
たまゆらの 春に命は ありやなし
丘にも花は 咲きにしを
あてなる花は 咲きにしを」（第一節）

わが来し方を顧みれば、予想や思案のほかにあるのが人生というものらしいと思う。これらの詩も戦時中のいろいろな経験があったり、東京を去るということがあったりして、生まれたものと言えるだろう。しかし、こういうことは、人それぞれにいくらかもあることであって、稀には、志を立てて終始一貫、人生を生き抜いた人がいるかもしれない。しかし、本当にそうかどうかは本人の「最後の詞の最後の一句」（森羅外『最後の一句』）を聞いたとしても、なかなか分からない話だ。棺を蓋しても定めがたいのが人間というもののらしい。

「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」（『論語』「為政第二」）の「思ふ」は「考える」意のようだから、「我思ふ、故に我あり。」という西洋哲学と（日本語において）呼応するもののような。教科書の單元名にも、似たような趣旨の言葉が見られる。「自分を見つめる」（一年）、「心を聞く」（二年）、「心の在り方」（三年）などである。事は常にわれわれ一人ひとりの身辺にあり、思索は常にわれわれ自身のなかにある。言葉は、「こんにちただいま」のことであるとともに「いついつまでも」のことでもあるのではなからうか。

（注）昔の高校・大学予科の学寮の多くは、学生の作詞・作曲による寮歌を持っていた（一高寮歌は約三五〇編）。今なお全国寮歌祭があり、地方ごと・学校ごとの寮歌祭やその集いが行われる。独特な懐メロである。

宮地 裕（みやじ ゆたか）

大阪大学名誉教授。一九二四年東京都生まれ。著書に、『新版 文論』『敬語・慣用語表現論』（ともに明治書院）などがある。光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員。中学校国語教科書1（平成十八年度版）に、書き下ろし教材「胸の底の人と言葉たち」を執筆。

言葉・ふしぎ発見！（一年）

新しい指導を考える会

身近な文章をきっかけに

『言葉を探検する』（一年第七單元）の授業を構想する際、新聞・雑誌・広告・小説など、自分の身近な文章の中の語彙をきっかけにして、言葉を調べ、広げる学習ができないかと考えた。「言葉を調べることにしておもしろい。」「もっと言葉を知り、語彙を豊かにしたい。」という体験をして、言葉の学習へのさらなる意欲を喚起することがねらいである。

発表例を示すことで、学習の見通しをもたせる

導入として指導者による発表例を見せた（資料１）。発表例を示すことで、学習のイメージや見通しをもたせることとした。発表例には、新聞のスポーツ面の見出しを活用した。勝ち試合の呼び方も、勝ち方によって変わる。そこで、「辛勝」の言葉を使っている記事を紹介し、今回の学習の導入とした。調べた内容をフリップにまとめ、それを示しながら、クイズ形式の発表で交流することを伝えた。「いろいろな勝ち方」を表す言葉をテーマに発表するため、『類語大辞典』（柴田武・山田進編／講談社二〇〇二年刊）を資料とした。

学習を始めるにあたって

① 参考文献の準備

言葉に關しての文献・資料は、一人一冊（もしくは一部）手
にすることができるよう準備したい。地域の図書館に依頼して
本を用意するとよい。

② 身近な文章の用意

文章が用意できない生徒には、新聞記事や雑誌などからヒントを与える。たとえば、「カリスマコーチ」という言葉から、カタカナ語について調べるなど、テーマを設定できる。

学習の流れ（四時間扱い）

第一時 指導者が発表例を示し、発表のイメージをもたせながら、学習の流れを説明する。

第二時 気になる語彙のある文章から、各自の調べるテーマを考える。

第三時 テーマにそつて参考文献や参考資料を探し、フリップを作る。

※教科書の言葉探検のテーマ例（二年P179）を参考にするとよい。

- ・自然を表す言葉……天気欄などから
- ・略語……新聞、雑誌などから

第四時 フリップを見せながら、「言葉・ふしぎ発見！」大会を開く。

※授業後、フリップは教室に掲示する。

日本サッカー「辛勝」

勝ち方・いろいろ

言葉も・いろいろ

压勝

相手を圧倒して勝つこと

樂
勝

楽に勝つこと

完勝

不安なく完璧に勝つこと

快
勝

気持ちよく見事に勝つこと

勝

常に勝つこと

勝

かろうじて勝つこと

☆大相撲などであらうじて運良く勝つことを、「何を拾う」と言うでしょう。

参考文献
（『類語大辞典』講談社）

▲最後に、みんなが知らなかつたと驚くようなクイズを入れる。

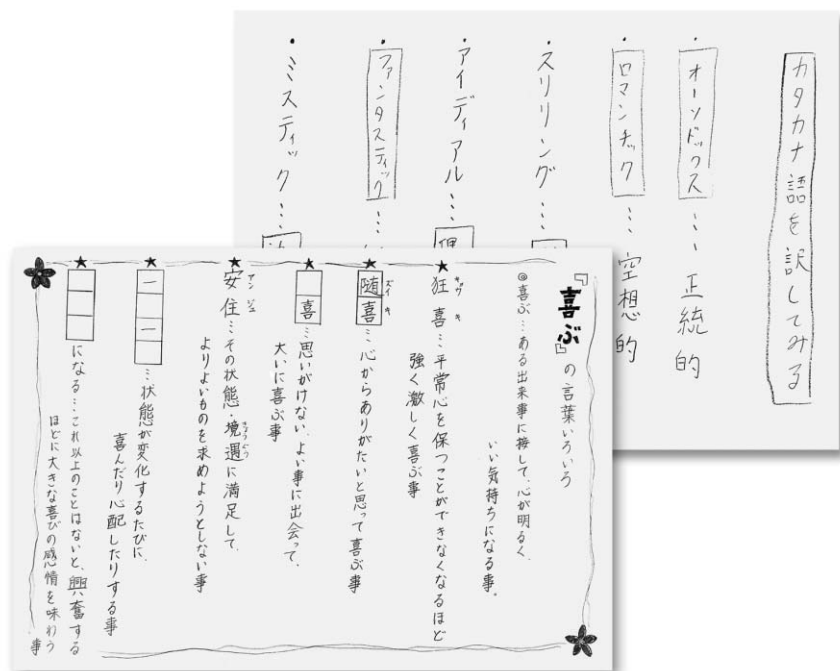
▲参考文献を必ず明記する。

する。

おわりに

本実践では、調べる活動も発表会も、生徒たちは非常に興味深く取り組んでいた。言葉を知り、言語生活を豊かにする国語教室を今後も展開していきたい。

生徒が作ったフリップ例



地域の人々へのインタビューで 言葉の力をつける（二年）

新しい指導を考える会

地域の方々と「文化」や「芸能」を体験する学習

本校では、毎年一学期に学校を地域に開く取り組みの一つとして、体験学習を実施している。これは、地域の中から、職業や趣味を通して一芸に秀でていらっしゃる方を講師としてお招きして、体験や発表の学習を行うもので、二十を超える講座を開設している。この体験学習にあわせて、毎年、国語科の授業で講師の方へのインタビューを実施している。インタビューに際しては、生徒たちに五つの言語意識（相手意識、目的意識、場面意識、方法・条件意識、評価意識）を明確にさせることに留意した。本稿では、『小さな「物語」を探る』（二年第七単元）と関連させて取り組んだ実践を紹介する。

指導の目標

単元計画として次のような価値目標と技能目標を設定した。

価値目標 ・事前の準備や実際のインタビューを通して、地域の方々の生き方や考え方を学ぶ。

技能目標

- ・インタビューを通して、必要な情報が収集できる。
- ・言語意識をもってインタビューができる。
- ・聞き取った情報を整理し、わかりやすく発表できる。

を想定したシナリオ作りに取り組んだ。

第四時では、グループごとに役割を決めて、作成したメモとシナリオを基にしてインタビューの練習を行った。グループ内の相互評価を通して、気づいたことや改善点を本番のインタビューで取り入れるように確認する場も設定した。

インタビューシナリオ 2年1組 Aグループ 氏名			
目的	相手	場面	方法
講師の方のことをよく知り、文化体験学習を楽しみたい。	文化体験学習の講師の方	講師の教室	直接対話によるインタビュー
質問事項			
質問の意図とポイント			
予想される答え			

第三次（五時）

事前に講師の方に連絡を取って、インタビューに臨んだ。体験学習当日、講座開始前に一時間の授業枠を設定し、学年全体を集めて簡単な説明を行ったあと、グループごとに講師控え室などでインタビューを行った。一クラス九グループ、学年四クラスなので、三十六人の講師の方にインタビューをお願いした。

実践報告（七時間扱い）

第一次（一、二時）

本単元の学習の意義や目標をとらえさせてからグループを編成し、インタビューの準備を行った。グループは男女各二名ずつの四人編成とし、仕事分担はインタビュー一名、記録者二名（カメラによる撮影役と発表用原稿作成役、発表の進行役一名とした。インタビューの相手は、講師として来ていただく方の一覧表の中から代表者に選ばせた。その後はグループ単位で、インタビューには何が必要か、どんなことが大事かなどについて話し合いを行った。

第二時では、視聴覚教材（ビデオや「光村国語デジタル教科書」）を用いて良い例と悪い例を比較しながら、インタビューの基本的な形式について学習した。

第二次（三、四時）

第三時では、ワークシートと課題プリントを活用して、インタビューで聞くべき具体的な内容と効果的な尋ね方・聞き方について学習し、質問メモを作成した。また、実際のインタビュー

第四次（六、七時）

まとめとして、この二時間でインタビューの記録を発表できる形にまとめ、各グループごとに発表した。インタビューアと原稿担当の記録係はインタビューの内容を発表用原稿にまとめ、撮影担当の記録係と発表の進行役は発表内容とポイントを模造紙にまとめた。ここでは、どうすればわかりやすい発表ができるかの工夫を考えさせた。具体的には、事実と意見・感想を分けること、視覚に訴える実物を用意すること、発表者によるロールプレイングなどについて話し合いがなされた。

クラス単位での発表会では、評価用紙を準備し、評価意識を明確にしながらか相互評価に取り組んだ。

また、発表を終えたところで、どんな言葉の力を獲得し自分のものにできたかを考える、振り返りの時間をもった。

おわりに

国語科は、生きてはたらく言葉の力を育む教科である。生徒たちが生活の中で生き生きとした言葉を駆使するためには、言葉の学習がなにより大切である。言葉を学習することと生活の中で言葉を使うことを相互に関連させ、さまざまな言語活動例を取り入れて実践しているが、その中で指導者として常に念頭にあるのが、五つの言語意識である。生徒たちが、相手意識、目的意識、場面意識、方法・条件意識、評価意識を確かに身につけて、言葉の力を獲得していけるような、そんな授業をこれからも行いたい。

雨の名 風の名

俳人 宇多 喜代子

初冬のある日、数人の仲間と奈良県の山村を歩いていたとき、それまでの好天が一転してにわか雨となった。向かいの山には日が照っているのに、その雨は少し待てば止む「しぐれ」だとわかる。近くの農家の軒下を借りて、しばらくの雨宿りをさせてもらったのだが、雨があがって歩きはじめたとき、仲間の一人が「少しの時を過ぎてゆく雨」を「時雨」と書いた最初の人って、すぐれた気象予報士だったと思うね。」と言った。すると、「夏の夕方に降る『夕立』だってそうだよ。」と誰かが言い、ただの雨が、季節や降りようによって、いくつもの名を変え、ることに話が及んだ。

そんな話を耳にしながら、私が中学生のころ、祖母が、たまたま道で出会った呉服店の店員さんに「地はねずみで、それに雨を降らせてください。ニビイロにしたいのだけれど、ギンネズにしましょう。雨も夕立では派手だろうから、春雨くらいがいいかもしれない。」と、着物の色柄を注文しているのを不思議な思いで聞いたことを思い出した。

「ニビイロ」「ギンネズ」が「鈍色」「銀鼠」という色の名で

て雪の名である。そのいずれにも解説が付されているが、どんな詳しい解説よりは、暮らしのうちに体験した現物にまさるものはない。

「春雨」の説明を百回聞くよりは、春の雨の中を一度歩いてみるのだ。すると

てのひらを春雨傘の外へ出す

杉本 零

の作者が、なぜ掌を傘の外に出したかということや、私の祖母の着物の柄が細い斜線を図案化したものであることなどがわかってくる。

いくら春の風を受けていても、いくら桜が咲いていても、無関心な目には無いも同じだが、かといって春風を受けることや花を見ることなどは、特別に学ぶことではない。子どものころから大人たちの「花が咲いた」「風が暖かくなった。」という言葉の中で過ごしておれば、大人と同じようにわかってくる。

忙しさを此処に逃れて春風に

星野 立子

年々にわが立つ花下も定まれり

相生 垣瓜人

なども、なんとなくわかってくるだろう。

春になり春風がふく、暖かくなって花が咲く、という天然自然とつき合っているうちに、この国の四季の変化や、地域ごとの観天望氣が身につく、先人たちが残してくれた雨の名や風の名が理に適ったものであることをなるほどと思うようになる。

思えば初冬の山村での、「時雨」と書いた最初の人って、

あることも、鈍色という暗い風色が不祝儀の色だから明るい銀鼠色がいいということも、大人になって知ったことだったが、「夕立」ではなく「春雨」にしようというところは、祖母と呉服店の店員さんとの会話を聞いたときにわかった。

いくら伝統的な色柄の名があるとはいえ、色見本も柄見本もないところでのこの程度の会話で、祖母の希望にぴったりの着物が出来上がるのだから、特定の言葉を共有するということは魔法みたいだと思った。いくつになってもその魔法がとけず、五十歳になったときに、祖母を真似て懇意の呉服店に「濃いめの枯葉色に霰ではどうかしら。」と注文してみた。すると、「霰小紋ですね、いいでしょう。」との返事である。私の場合、呉服店専用の色見本帳を繰って決めるという段取りになったが、その見本帳を見ると、日常さりげなく使っている色や柄をあらわす言葉が、ことごとく自然の動植物や気象に由来していることがわかる。

色見本帳と同じように「俳句歳時記」を繰ると、いやでも目に入ってくるのが、季節ごとの雨の名、風の名、雲の名、そし

すぐれた気象予報士だったと思うね。」というさりげないわが仲間の一言は、この国の言葉文化を象徴する一言であった。昔々の誰かが、経験則のうちに初冬の山添いの雨がひととき降って止むということを知り、その現象を「時雨」という字に残してくれたのだ。この「突然に発生してパッと止む」という気象現象は、虫時雨、蟬時雨、露時雨、落葉時雨、などの言葉を生み、二倍三倍にふくれて愛誦され続けている。外国人にとっては雑音でしかない虫の音や蟬の声を、雑音ととらえる日本人はいない。

日本を知らない外国人に、日本とはどんな国ですかと問われたとき、何と答えればいいか、という質問を受けることがある。言いたいことがあまりにも多く、かえって何も言えなくなってしまうのだが、せいぜい「四季の変化によって衣食住が成り立っており、そんな中で使われている言葉のゆたかな国。」ということを根っこにして、それぞれの考えを伝えるよりないだろう。それも特別な人たちの言葉ではなく、普通の人たちが普通に使う言葉が大きな遺産財産であることを言えたいと思う。この国が「言霊の幸ふ国」であることを、誇りをもって言えたい。

宇多 喜代子（うだきよこ）

俳人。一九三五年山口県生まれ。二〇〇二年、紫綬褒章受章。著書に、句集『夏の日』（海風社）『夏月集』（熊野大学出版局）、随筆『わたしの歳事ノート』（富士見書房）などがある。光村図書中学校国語教科書3（平成十八年度版）に、書き下ろし教材「俳句の可能性」を執筆。

心豊かな言葉

アナウンサー・千葉市女性センター名誉館長 加賀美 幸子

「言葉の世界」は広く深く、その一つの側面を捉えても、いよいよ深くなるばかり、更に先は広がるばかり…。「言葉」という、一つの言葉が包括する世界は、人間のさまざまな行為に寄り添って千変万化、限らない深さと広さ。生きることによって添っているのが「言葉」であろうか。

言わずもがな、日常の暮らしも、全て、私たちは「言葉」と共にあり、政治、経済、教育、その他の場面を取り上げても、全ては、言葉ぬきには考えられない。

表現という側面から「言葉」を見つめても、音声表現による言葉、文字表現による言葉、手話など身体表現による言葉、その他多くの表現があるが、その言葉の一つひとつは、内容と心に乗せて表すものだから、言葉イコール内容・心であり、「言葉」は「人そのもの」と言えるかもしれない。

子供の頃から、私たちは、「言葉は自らを表現し、人に伝えるものだから、大事にしなければならない。」と、学校でも家でもどれほど言われてきたことであろうか。

勿論、内容と心に乗せて伝える道具としての言葉は、なによ

り大事である。しかし、「言葉は考える道具だから大事にしよう」という言い方はされなかったように思う（もしかしたら私の耳に届かなかったのかもしれないのだが）。

考える道具でもある言葉。私たちは、言葉で概念を整理し、構築し、物事をあれやこれや考えている。ということは、言葉が乏しければ、それだけ考える力も乏しく、弱く、薄くなるかもしれない。表現が巧みでなくても、考えの深く広い人もいる。考える道具でもある言葉のことをつい忘れがちであるが、その意味での言葉も、私たちは大事にしたい。

「伝える言葉」「考える道具でもある言葉」はともに豊かでありたい。豊かさとは何か：言葉の数はやはり多いほうが良い。いくら持っていて重くはないのだから。言葉多くといっても、勿論おしゃべりということではなく、蔵の中に言葉が豊かに蓄えてあれば、考えも深まり、物事を伝える時も、臨機応変に、自在に選り、又は削り、表現できることにもなる。怖いものなしである。使いたくなかったら使わなくてもいい、いつか必要な時がくるかもしれない。それが豊かさでもあろうか。又、豊

かさとは、言葉の心を、どこまで感じ捉えることができるか、ということにも関わってくると思う。しかし、言葉の心については表現のしようがない。

私は昨年の中大河ドラマ「風林火山」のナレーションを一年間担当したが、主人公・武田信玄役で多くの人々を惹きつけた市川亀治郎さんは、「役者はなにより、氣が大事。演技や言葉は磨けば上達するものだが、氣はそういうものではない。説明しがい」と。そして、それがあつかないかで、人に伝わるかどうかが決まってくるとおっしゃっていた。私たちアナウンサーの仕事もしっかり。同じ話をしても、悲しいかな、その心や氣が伝わる人と、そこまではない人もいる。プロの世界でも、日常生活のどの部分でも、全てを左右するもの。

説明しがたく、捉えられない「氣」や「心」だが、「言葉」を探っていくと、何かが開けてくることがある。例えば「辞書」を開いてみる。誰もが願う「幸せ」や「優しさ」――「幸」という言葉を白川静さんの『常用字解』で調べると、「両手にはめる刑罰の道具の象形」とある。幸せとは、無実の罪で捕らえられる人も多かった古代において、命を奪われず、手枷だけの軽い刑で免れて本当によかった！本当によかった！…という心の叫び。それが「幸い」の意味でもあるのか…と思うと、幸せという言葉の心、その捉え方も違ってくるような氣がする。

「優し」を『言泉』や『日本国語大辞典』『広辞苑』その他何冊かの辞書で引いてみると、「優」の意味の最初に「恥ずかし」と同根とある。「優しさ」とは、こんなことをしたら恥ずかしいと思う、軟らかな心のことであろうか。改めて言葉の心を知りたいがする。優秀、優越感、優秀、などと言う言葉は好きで

はないが、「恥ずかしさ」と同じ心であることが確かめられ、幸せであった。

解りきった言葉も辞書を引くと、改めて、言葉の心に触れる思いがする。最近では電子辞書が簡便であり使い勝手がよいと、多くの人が利用しているが、言葉の厚みと深さがそのまま形になっている辞書そのものの豊かさには及ばない。

いわゆる「辞書」は、調べたい言葉だけでなく、その頁と隣の頁にある言葉たちにも触れることが出来る楽しみ。言葉に行きつくまでのもどかしさも期待感ある行為。でも時間が勿体無い、そんな暇はないというのが昨今だが、まわり道、道草や無駄なことの中に、実は大事な鍵、人生のメッセージが豊かに潜んでいることに気づきたい。

言葉だけでなく、道草や一見無駄のようなこと…そこを通過するゆとりがあるかないかで、その後の人生も変わってしまうことの怖さを、私たちは、せわしい時代の今、思い知らされているような氣がするのである。

加賀美 幸子（かがみさちこ）

アナウンサー・千葉市女性センター名誉館長。一九四〇年東京都生まれ。現在、『NHKアーカイブス』『列島縦断俳句スペシャル・短歌スペシャル』（NHK）などの番組を担当。著書に、『こころを動かす言葉』（海電社）『読み聞かせる戦争』（光文社）などがある。光村図書中学校国語教科書2（平成十八年度版）に、書き下ろし教材「古典の心に近づく」を執筆。

生徒のひと言ひと言を受け止めて、受け流す

東京都台東区立御徒町台東中学校教諭 甲斐 利恵子

つい先日のことです。これからの単元を説明しているとき、いつも反抗的な態度を取りがちな生徒がひと言、「なんでそんなことしなきゃいけないんだよ。」と聞こえよがしに言いました。工夫してがんばろうと思っていたときだけに、すごく傷ついてしまい、とたんに自信がなくなっていました。

こんなとき、どのようにすればいいのでしょうか。



しまったひと言に傷つくのは当然です。中学生は、本当は二歩先に進むことを切望しているのだと思います。自分を深く理解し、成長させてくれる人を求めています。前回も述べましたが、生徒たちは自分を成長させてくれる人が大好きです。マンネリが大嫌いなくせに新しいことには用心深い。幼い子のように、言われたとおりなんでも「わーい!」というわけにはいかないものです。「大丈夫なのかよ。」と声に出しても、常に「大丈夫ならがんばる。」という気持ちで根底にはあります。説得力を求めているのです。

生徒のひと言ひと言に対して、「そんなの気にしない、気にしない。」と言って片づけてしまうこともできます。が、それよりはむしろ、そのひと言をしっかりと受け止めてみるというのはどうでしょうか。「受け止めて、受け流す」のです(なんだから禅問答のようになってきましたね)。

「なんだこれだけか。つまんねえー。」

では、「受け止めて、受け流す」にはどうしたらいいのでしょうか。わたしの若いときの実践を紹介してみましょう。

確か外来語の単元でした。大村はまさに懂れていたわたしは、「よし、今度の単

生徒のひと言ひと言を真正面から受け止めて、傷つきすぎたり、落ち込みすぎたり、得意になったりするのはいや、要注意です。日ごろからわたしたちは、生徒を受け止めるようにする習慣と同時に、常に「説明できる言葉」をもつて受け流す強さが必要です。

「なんでこんなことするのー。」
という言葉に傷つかず無視もせず、これからの学習をきちんと説明できたらいいですね。もちろん毎回生徒に説明しなくてもいい。フフ。と言ってみるのもかっこいいかもしれません。生徒たちは先生の真摯な姿をきちんと見てくれるものです。笑顔で共にがんばりましょう。



元は生徒一人ひとりに別々の教材を用意しよう。」と意気込んでいました。野球部の生徒には野球の新聞記事、テニス部の生徒にはテニスというように。一人ひとりの顔を思い浮かべながら対話するように、教材を用意しました。ドキドキしながら教室へ。案の定、生徒たちは大喜び。渡された封筒をのぞき込むうれしそうな顔。なんとも言えない温かい雰囲気がありました。

ところが、全員に封筒を渡し終えたとき、もう学習を始めていた生徒が「何調べるのー。」「カタカナ語と外来語ってどうやって見分けるのー。」「外来語を抜き出したあとどうするのー。」と矢継ぎ早に質問をします。最初に「外来語を抜き出して自分の考えをまとめなさい。」と言ってありました。にもかかわらず、生徒は質問してきます。「だから最初に言ったでしょ。抜き出してそれを見て、自分の外来語に対する考えをまとめるのよ!」

生徒たちは、自分だけの教材を手にしてうれしかったのだと思います。しっかり学習しようと思つて質問したのだと思います。その結果、次のひと言が聞こえました。「なんだこれだけか。つまんねえー。」わたしは深く傷つきました。

まったく恥ずかしいことですが、そのときのわたしは、「一人ひとりの教材」を用意

した自分に酔っていました。この工夫を支える根本的な目標の設定が曖昧であり、どんな力をつけたくてこの工夫をしたのか「説明の言葉」をもちませんでした。だから、生徒の言葉に動揺し、漠然とした不快感で深く傷ついたのだと思います。

結果は悲惨でした。一人ひとり短いながら発表をしました。ほとんど全員の生徒が「外来語がいっぱいあることに気づきました。これからも外来語に注目していきたい」と思います。という内容です。今も「異口同音」という四字熟語を見ると悲しくなるのは、この不甲斐ない実践があったからでしょう。

教師は「説明できる言葉」をもつことが必要

この経験から、わたしはしっかりした「説明の言葉をもつべきだ。」と痛感しました。どんな力をつけたいのか、その目標にこの教材はふさわしいのか、有効な学習を実現するための手引きになり得ているのか。常に自分に問い続けて学習を組み立てていかなければなりません。「説明できる言葉」をもつて初めて、生徒の成長したい思いはしっかり「受け止めて、不快感で傷ついたり動揺したりすることなく「受け流す」ことができるのだと思います。

問われる教師力 2

先号では、「問われる教師力」と題し、「授業づくり」においては、学習者ウォッチング力、自家菜籠中のものとしての育てたい力の一覧表をもつこと、学習材候補から学習材にする力、育てたい力と学習材、学習活動（言語活動）と学習形態の組み合わせ方が問われるだろうということ述べた。今号では、学習指導展開中に問われる教師力を中心に述べる。

1 学習指導展開中に問われる教師力

一つの単元が始まると、指導者は教室という状況の中でさまざまな力を駆使してフル回転しなければならなくなる。学習者を動かして学習を進めながら、個々の学習者、また学習者集団の動きや反応、さらに全体の流れを見、それそれぞれに対応させながら授業を展開させていく。授業全体を評価しながら進めていくといつてよい。どこをどう見るか、チェックポイントを挙げてみよう。

(1) 授業が始まってすぐの場面

・学習者の学習材に対する反応―食いつきはよいのか。どの程度の興味を示しているか。興味は継続できそうか。

・学習材と言語活動が合っているか。その言語活動で育てたい力はつけられそうか。

・指導者の発話・発問、指示は学習者に伝わっているか。有効にはたらいっているか。

(2) 授業の中ほど

られているか。

・単元全体、または単位時間の学習の総体的評価（成果や問題点）。学習材の適不適。複数教材（学習材）の必要性の有無。学習形態が個々の学習者にとってどのような影響をもたらしたか。

2 プロとしての教師力

国語教師もプロとして身につけていなければならないモノがある。それは学習者にとってはモデルであり目標である。どのような力・技なのか、羅列してみよう。

(1) プロとしての基礎力

・声の出し方、発音、滑舌。

・音読、朗読、できれば節をつけて歌えること。

・文字（毛筆・硬筆・板書）を示範できること。

・表記法、原稿用紙の使い方。

・モデルとなるようなスピーチ（短話）が作れること。

・モデルとなるような文章（詩、短歌、俳句、エッセイ、創作など）が書けること。

・演技、演劇に関する知識。

(2) プロとしての知識・技能

・話し合いのやり方、させ方。

・ワークシートの作り方。

・「学習の手引き」の作り方。

・辞書に関する知識。

・パフォーマンス（立ち位置、時間配分、TTや招待

・「学習の手引き」は、個々の学習者に対して有効にはたらいっているか。

・モデル提示（指導者や級友、先輩がモデル）は有効適切であったか。

・学習者につまずき、停滞はないか。だれがどういうことに対してつまずき、停滞しているか。学習者のそれまでにつけたはずの能力の欠落部分、不十分な点はないか。

・学習材と学習活動によって学習が成立している（熱中している）か。言葉の力は確実につけられているか。学習材の適不適の判断と、新たな学習材投入の必要性の有無の判断。

・学力が不足して練習の必要性を感じるか。方法を変えて練習をしたほうがよいという決断はあるか。

・学習形態は適切か。特に、話し合い（学び合い）学習で、ペアがよいグループがよいかの判断、書く活動との組み合わせ、書く時間の確保は取られているか。学習の継続は可能かどうかの判断。

(3) 授業の終わりのほう

・単元の学習目標を確かめて学習が進められたか。かけた時間は適量であったか（振り返り記録などにより）。

・個人差に応じる学習内容であったか。個人差に応じた指導ができたか。学習者個々の学習に対する満足度、成就感、出してきた疑問などをつぶさにとらえ

講師との連携など。

・ICT教育に関する知識、道具の使い方。

・情報の獲得、保管、利用技術、カード使用など。

・学習材候補の収集と学習材化力。

3 学校全体に働きかける教師力

言うまでもないが、教師は自立した読書生活者であること、言語文化への関心と接触（演劇、落語、古典、古典芸能、さまざまなメディア）を人一倍心がけること、地域の文化や言語への関心をもち接触を図ること、が必要である。

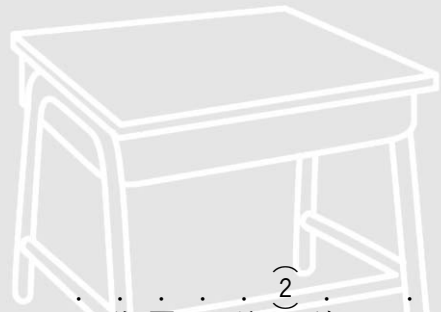
新しい学習指導要領による新しい教育が始まれば、国語教師は他教科と連携を図りながら、学校全体の国語教育の推進者となっていかなければならない。教科だけに閉じこめることは許されないと、肝に銘じていただきたい。

4 最終回にあたって

国語教室運営にあたっての小さな疑問、大きな声では聞けない教室での身の処し方、そんな声に応じようと始めたのがこのコラムでした。平成十五年のことです。

今回53、54号で「教師力」として総括してみました。一つひとつの項目は具体的な授業の中で、指導者、学習者、学習材、学習活動とのかかわりをとらえるべきものです。まず、自分が授業研究をする。そして他人の授業研究に多く参加し、話し合い、学び合う。「教師力」につながる唯一の道と信じます。

（元岐阜大学教授）



文学教材研究における観点のもち方

山梨学院短期大学講師 松野 まつの 洋人 ひろと

よい授業を生み出すための準備作業として教材研究が重要であることは、だれもが認識していることですが、ではどのような観点に立つて教材を研究したらよいのでしょうか。今回は文学教材に絞って教材研究の観点について考えてみたいと思います。

1 前提として ―「作品研究」ではなく「教材研究」―

まず留意すべきは、「作品」研究ではなく、「教材」研究だということです。「教材」の研究は、当然のことながら授業を念頭に行われるわけですから、それは「目標」や「生徒（学習者）」の実態を踏まえたものでなければなりません。授業における失敗の多くは、実は生徒の実態把握が十分でなかったり、教材研究が生徒の実態とかけ離れていたりしたために起こっていることが多いのです。

それから、新出漢字、難語句、作品の時代背景、作者などについては、文種に関係なく共通の研究事項として確認しておかなければ

なりません。ただし、研究は十分にしても、授業でどこまで踏み込むかは、授業時数と生徒の実態次第です。

2 感動を高めるための仕掛け

生活における読みにおいて感動はゴールですが、授業における読みにおいては、感動はスタートです。その文章を読んで、読者である「わたし」はなぜ感動したのか。その理由を確認するために表現を吟味することが、読みの大事な作業です。

例えば、一年生に『さつき』という教材があります。この教材を読んで、わたしたちが最も感動させられるのは、主人公「惇」の父親が岩場で滑落し、極めて危険な状況にありながら無事生還できたことであり、そこに生まれる「惇」の喜びや安堵感は、「惇」に寄り添って読み進めてきた読者のものでもあるのです。

しかし、この喜び（感動）は、生還に至る過程に、「惇」の心に「不

安」や「焦り」や「恐怖」を生み出させた数々の仕掛けが存在したからこそ増幅して読者の心に迫るのです。その仕掛けをしっかりと整理し確認することが、『さつき』の教材研究では重要なのです。

もう一例紹介しましょう。同じ二年生の教材に『大人になれなかった弟たちに……』があります。太平洋戦争中、生まれて間もない弟が栄養失調で死ぬという出来事を中心に、母の苦労や「僕」の思いが綴られた悲しい内容の話です。

そして、その「悲しさ」こそがこの教材の感動性です。しかし、出来事の内容だけが読者の心を揺さぶる要因ではありません。この教材では「文体」に着目させたいのです。悲劇的な状況を取り上げながら、文章は感情を抑えた淡々とした表現になっています。しかも、全体的にセンテンスが短く、簡潔な文体にもなっています。このような文体上の特色が、読者の心に登場人物の悲しみを深く染み込ませる効果を上げているのです。この教材では、文体の研究を外すことはできません。

3 心情の表れ方

登場人物の心情把握は、文学の読みの授業において最も日常的かつ普遍的な学習です。心情とは、喜怒哀楽などを中心に、心にあらる感情をいうのですが、文学においては、通常それらは、「嬉しい」「悲しい」「楽しい」などという直接的な表現では表しません。では、人物の心情はどのように表されているのでしょうか。

二年生の教材『字のないはがき』で確認してみましょう。この教材における読み取りの中心の二つは、「私」や末の妹に対する父の心情ですが、当然のことながら、「不安」「つらい」「悲しい」といった心情を直接説明する文言は出てきません。心情は、「私」への手紙の

文字や文言、末の妹に対する行為の中に込められているのです。

三年生の教材『温かいスープ』に登場する、バリのレストランの母娘の「私」、すなわち筆者に対する心情も、直接には何も表現されていませんが、「二人分のパン」を黙って添える行為や、余ってしまったからと言って「湯気の立つスープ」を差し出す行為の中にはっきりと読み取ることができるのです。その母娘に対する「私」の心情も、「涙がスープの中に落ちるのを気取られぬよう、「さじ」「さじ」かむようにして味わう」行為の中に集約されているのです。

このように、登場人物の心情は、その人物の言動や行動に表れることが一般的なのです。心情を精査する重要な観点です。

4 古典へのアプローチ

古典を読む目的が、昔の人のものの見方や考え方、思いなどにふれることだけならば、口語訳した文章を読めば事足りります。しかし、言語の教育としての古典学習であるならば、文語表現を味わうという点が大事になります。歴史的仮名遣いの読みや、古語の意味を確認することは、教材研究の必須事項ですが、最も重視したいのは文章のリズムです。

二年生の『扇の目的』を例にとれば、次のような点を確認することができます。第一に、部分的に五音・七音、またはその変形音数で表現されている。第二に、対句表現が多用されている。第三に、促音表現が多い。

教材が変われば別の要素も加わるでしょうが、このように文体上の特色を踏まえ、文章のリズムを意識させることが重要です。しかもそれは十分な音読によって、生徒に体感させる必要があります。そういう意味では、教師もまた十分な音読研究が必要となるのです。

連載 新しい書写実践の試み ⑥

動きの中から行書の特徴をつかむ

―「白夜」―（二年）

新しい指導を考える会

1 実践の趣旨

中学一年生の書写は、行書の入門期にあたる。初めて目にする書体に抵抗を感じる生徒も多い。そこで、「競争する」という遊びを通して、動きの中から行書の特徴（点画の連続、点画の丸み）をとらえることを目指す。

2 指導計画

第一時 行書がどんな書体なのかを知る。

第二時 行書の特徴（点画の連続、丸み）を理解して「白夜」を書く。（本時）

3 本時の目標

次の二点を目標に授業を行った。

- ①「行書は難しい」という先入観・抵抗をなくす。
- ②実際に筆を動かしながら行書の特徴をつかむ。

4 本時の展開（次ページ参照）

5 成果と課題

実際に筆を動かしながら、行書の特徴である点画の連続や丸みを理解することは重要である。今回の実践では、「試書1」で楷書の筆使いを引きずっていた生徒も、「まとめ書き」ではより行書らしい形を身につけることができていたように思う。教科書を見て行書の特徴を理解することはできても、それだけで技能まで習得できるわけではない。しかし、行書の入門期にあたる中学一年生だからこそ、知識・技能の両方を身につけることが重要であり、それは教師が実際に示したり、生徒が自分で体験したりすることによって、徐々に身についていくものだと考えている。



【試書1】



【まとめ書き】

4 本時の展開

【目標】 行書の点画の連続、丸みを理解する。

【評価】 行書の点画の連続、丸みを理解することができたか。（学習プリント、まとめ書き）

	学習の展開	指導上の留意点
導入	○教科書の教材文字を見て「白夜」を書く。（試書1）	・学習プリントを配る。
課題を焦点化する	○教材文字と「試書1」を比較して、自己の課題を学習プリントに書く。（比較1）	・筆使いを中心に比較するよう指示する。
	○教師が黒板に模造紙を貼り、すべての点画を連続させてできるだけ速く「白夜」を書く。生徒は、その間何秒かかるか、声を出してカウントする。	・字形より速さを優先させて書く。 ・「白」の横画の連続、「夜」の人偏の連続や丸み、右払いの変化など、行書の特徴を意図的に示す。 ・模造紙は縦78cm×横54cmのものを使用する。
	○教師と生徒でどちらが速く書けるか競争する。（試書2）	・教師の書き終わりの合図とともに筆を置くことを事前に確認しておく。 ・教師より速く書けた生徒を確認し、少なければ再度試みる。
点画の連続、丸みを理解する	○再度「試書1」と教材文字を比較し、「比較1」では気づかなかった課題を学習プリントに書き、発表する。（比較2） ＜生徒の反応＞ ・筆を速く動かす。 ・点画をつなげる。 ・折れを丸くする。 など	・競争して気づいたことをもとに考えるよう助言する。 ・行書には点画の連続、丸みという特徴があり、見えない画と画との連続が行書の形を作るうえで重要な要素になっていることを伝える。 ・丸みについては、野球の走塁などを例に挙げ、より速く移動するために軌道が丸くなっていることを伝える。
速く、整えて書く	○「試書2」と教材文字を比較して、問題点を学習プリントに書き、発表する。（比較3） ＜生徒の反応＞ ・つながりすぎ。 ・読みにくい。 ・形がよくない。 など	・文字は相手に伝達するための手段でもあることを伝え、「これが手紙の字だったらどう？」など具体的な場面をイメージさせる。 ・教材文字には連続している部分としていない部分があり、後者では画と画の間に一呼吸おくことで、筆の動きにリズムが加わっていることを伝える。 ・速く、整えて書くためには、筆のリズムが重要であることを伝える。
点画の連続、丸みに注意して書く	○教材文字の点画の連続や丸み、見えない画と画との連続に注意しながら「白夜」を書く。（まとめ書き）	・筆の動きがどのようなになっているか想像しながら教材文字を見るよう助言する。 ・点画の連続や丸みは、筆の動きによって自然に出てくるものであることを伝える。
	○学習プリントとまとめ書きを提出する。	

中学校国語科書写の 大きな飛躍を

山梨大学教授 宮澤 正明

国語科書写は、小・中学校の九年間を通して、一人ひとりの書写力の向上を目ざしています。書写力は技能を中心とすることから、反復練習や積み重ねの学習に負うところが大きいと言えますが、特に、小学校における点画の筆使い、字形の整え方などの基礎・基本は、それぞれの知識とともに実技を通して繰り返し学ぶことで習得が可能となります。中学校では、速書きとしての行書を中心に学習しますが、これもまた実技による反復練習によってその技能を習得せざるを得ません。

しかし、中学校国語科書写は授業時数に制約があり、十分に反復練習をするだけの時間が保証されているとはいえず、行書に關しては、ほんのさわり程度の学習で終わっているのが実情ではないかと思われます。

加えて、中学校生活では、他教科の学習内容の増加、部活動への参加、進学や進路のことなどによって生徒の興味・関心の対象が拡大・増加するときであり、小学校から引き続き行われる書写学習への関心や期待感が薄れていくのはやむを得ないと

ころです。

とはいえ、義務教育の結実である中学校期は、生徒にとって、文字を書く活動が急速に増し、また、自我の形成・確立とともに、他者の書き文字と比較して、自分の書き文字にコンプレックスを抱き始める時期でもあります。社会人になったとき、自信をもって文字を書けるということは、とても有益なことです。自分の書き文字に自信をもち、積極的に文字を書く活動ができる力を身につける大切な時期にあたるといえます。また、高校や社会に巣立つ前のこの時期に、日常生活における必要最低限のさまざまな書式や形式についての知識や技能を身につけておく必要があります。これらの点に關しては、指導者も生徒も強く認識してほしいところです。

そこで、中学校国語科書写をより興味深く学習し、自分の文字に自信をつけるための工夫を紹介します。これは、49号（第16回）でも紹介した工夫ですが、だれでも自分の名前に關して抱いている思い入れが、学習の動機づけになると考えます。字源までたとると漢字学習とリンクすることにもなります。

○自分の名前を、楷書と行書の両方で、自信をもって書けるようにする。

それぞれの文字に使われている点画の名称と筆使い、字形の要素は何か、小学校で学んだことを想起させ、徹底的に分析する。また、行書の特徴を活かしたとき、どのような書き方ができるかを数種類試みて、サイン風に仕立ててみる。

例 山本明子

- ・楷書の分析
- 「山」 縦画・折れ、画の長短・方向・接し方・画間
- 「本」 横画・縦画・左右の払い、交わり方・接し方
- 「明」 横画・縦画（はね）折れ、方向・画間、左右の組み立て方
- 「子」 折れ・反り・横画、接し方・交わり方

山本明子

・行書の特徴によるサインの試み

山本明子 山本明子
山本明子

また、作品化することで目標が明確になり、学習を意欲的にします。書写の学習は、いわゆる手本の文字による清書が目標となりがちですが、時に単元と単元との合間に、次のようなスペシャルメニューがあってもよいのではないのでしょうか。

○好きな言葉・文・歌詞などを、自分の好きな筆記具や用材を使って書く。

書写の学習は、与えられた文字や言葉を書くことが多く、常に受け身の学習に陥りやすい。基礎・基本を習得する際は共

通の課題になるのはやむを得ないが、時に、自己主張の場として思い切った方法をとることも必要である。それには、生徒自身が選んだ文字・言葉・文がよく、筆記具や用材も生徒が工夫すると関心度が高まるであろう。できた作品は掲示・展示し、一人ひとりのアイデアや努力をたたえ合う。個々の工夫だけに相対化しにくいいため、自信をつけやすい。ただし、遊びになつては元も子もないので、作品化する前に、既習内容を踏まえた練習を重ねることは言うまでもない。

文字を審美の対象として芸術的に表現したり、鑑賞したりするための学習は、高等学校芸術科「書道」の学習であり、義務教育では行われていません。しかし、文字を書くという行為だけでなく、書かれた文字を実用の具として見つめ、さらに日本古来の伝統文化としてとらえる視点も、この時期に芽生えさせたいところです。その意味で、文字・言葉選びから始めるこの試みは、たとえその出来映えは拙くとも、だれの真似でもなく、まさに「自己」の書き文字と主体的に対話する営みにはかなりません。このような機会こそが文字文化と遭遇するチャンスであり、芸術科「書道」への関心や理解につながるのだと考えます。

中学校での書写の学習が日常に生き、やがては芸術科「書道」への道標になるような、発展性のある興味深いものになるよう、関係者一同、生徒とともに考え、実践してみようではありませんか。

「国語デジタル教科書」を活用した古典の実践

— 国語力を向上させるICT活用教育 —

東京都日野市立平山中学校

1 平山中学校のICT活用教育の取り組み

本校は、日野市の「すべての教員が、ICT（情報コミュニケーション）技術 Information and Communication Technology）を活用した指導を実施できるようにする」という基本方針の下、ICT活用教育推進モデル校として、コンピュータを使った授業を日常的に行っている。国語科では十九年九月に、中学校全校の授業支援パソコンに「光村国語デジタル教科書」（以下、「デジタル教科書」）を導入し、実践が進められている。

2 「デジタル教科書」を活用した『徒然草』の授業

二年『仁和寺にある法師』（徒然草）の学習では、文語文の表現に慣れ、読み味わうことを意図して、「デジタル教科書」を活用した授業計画を立てた。以下に、その一時間の流れを示す。

- 「仁和寺にある法師」授業の流れ（二時間）
- 〈導入〉
- 「兼好法師が生きた鎌倉時代はどのような時代だったのか」自作資料「プレゼンテーションソフトを使って見せる。」
- 〈展開〉
- 1 「デジタル教科書」で本文を拡大投影しながら模範朗読を聴く
 - 2 冒頭文章の歴史的仮名遣いをツールのペン機能で線を引き確認する
 - 3 古語の説明をペン機能で線を引き確認しながら、内容を押さえる
 - 4 朗読練習
 - 5 冒頭文章の一部をマーカー機能で隠し、朗読に挑戦する
 - 6 穴埋め形式で朗読し、暗唱へのステップとする
- 〈まとめ〉
- 参考資料の動画「兼好法師と徒然草」で理解と味わいを深める

（2）作品世界のイメージを深める — 導入・まとめの指導 —

▼ 作品のイメージを深める



一学年から三学年までの古典教材ごとに、資料としてナレーションつき動画が収録されていて、導入やまとめで扱うのに適している。資料集だけでは補えない、時代の空気が伝わる効果的な映像資料である。二学年の資料を見ると、『扇の的』では、「屏風絵」をじっくり見せ、平家と源氏の戦いの様子とストーリーを説明している。また、当時の武士の暮らしを伝える資料では、「流鏑馬」の実演が収録されており、その迫力が伝わってくる。時代背景の知識を教える

（3）内容を深める

生徒が同じ画面を見ているので、画面上で色分けをしながら線を引いたり、歴史的仮名遣いを色分けし基本的な古語にペンで色をつけたりと、全員で重要ポイントの確認ができた。ツールの中に拡大機能があるため、わかりにくい部分は拡大し、繰り返し説明を加えることができ、より理解を深めることができた。

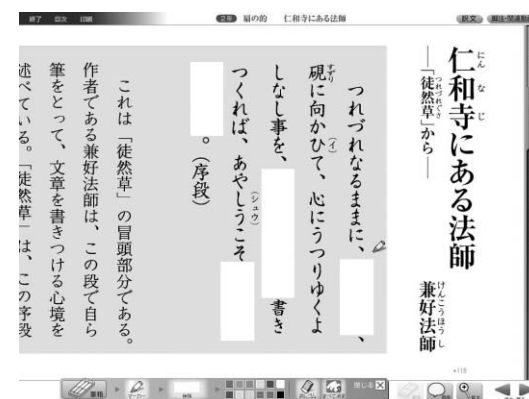
3 古典指導における「デジタル教科書」の効果

（1）文語文を読む力を培う — 読み・暗唱の指導 —

教科書の本文が瞬時に、大きく美しく映し出される。各自、手もとの教科書だけで追っていた朗読を、同じ画面を見ながら全員で確認し、読むことができる。同時にアナウンサーによる味わい深い朗読が、作品の個性を生み出し、生徒たちの心を引きつける。また朗読の音声にそって、行ごとに画面の文字色に変化していくため、どの部分を読んでいるかがわかりやすい。

冒頭部分の暗唱練習には、ツール内のマーカー機能を活用した。暗唱させたい部分を白のマーカーで塗りつぶし、穴埋め形式にするなど、画面の中で簡単に課題を作成できる。生徒たちは画面に集中し、意欲的に暗唱にチャレンジする空気が自然と生み出され、文語文を読む力を積極的に培うことができた。

▼ 暗唱させたい部分をマーカーで消す



4 おわりに

「デジタル教科書」は、使い方が非常に簡単でわかりやすい。ICT機器の扱いが苦手な人でも手軽に操作できるだけでなく、自分なりの工夫が加えやすく楽しく取り組むことができる。ナレーションのついた美しい動画は、授業に新しい空気を生み出してくれる。生徒に作品の魅力を感じさせ、理解の深まりを生み出す力となる。教科書と板書だけで進めてきた授業に、ふくらみをもたせることができた。

ICT活用教育の大きな意味は、生徒たちの意識（学習意欲）の温度差を瞬時に縮めることだと感じる。教室の中には国語が楽しみで待っている生徒も、受身の姿勢の生徒も混在しているが、美しい資料映像を共有できた時点で生徒の心の温度差は縮まる。そこからスタートできる授業は、クラス全体の国語力を向上させる可能性の広がりを感じている。

※日野市の取り組み

平成十八年度から、市内の全教員へ一人一台のコンピュータを配備、校務支援システムを導入している。また、校内LANや各教室用のICT機器も整備した。さらに十九年度は、「メディアコーディネーター」が各中学校に三週間連続して派遣され、教員への個別支援や、授業の中で生徒への直接支援を行ったりしている。

二十年二月二十九日（火）、平山中学校にて「ICTを活用した魅力ある授業づくりをめざして」を主題に、研究会が開催される。

連絡先 平山中学校 ○四二（五九三）三〇二五

平成18～21年度版 中学校国語教科書準拠 指導用ソフトウェア

大好評
絶賛
発売中!

光村

国語デジタル教科書

中学校版



もっと、国語が好きになる。

光村「国語デジタル教科書」は、教科書をそのまま拡大することで、全員で同じ画面に注目しながら学習できる指導用ソフトウェアです。

みんなで文章について意見交換をしたり、動画を見てなるほど! と思ったり。

教科書を立体的に活用することで、確実に国語の力が向上します。

(本ソフトウェアの使用にあたっては、プロジェクタ等の拡大提示装置が必要となります。)

「話す・聞く」編 (1～3年収録)

学校フリーライセンス
税込 52,500円(本体50,000円)

古典編 (1～3年収録)

学校フリーライセンス
税込 52,500円(本体50,000円)

※「学校フリーライセンス」とは、校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。

ただいま体験版配布中! 詳しい内容、体験版のお申し込みは、下記ホームページをご覧ください。

光村図書出版株式会社
www.mitsumura-tosho.co.jp

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
TEL.03-3493-5741 (デジタル教科書お客様窓口) FAX.03-3493-5483
E-mail:digital-info@mitsumura-tosho.co.jp

「光村の本」 好評発売中!

飛ぶ教室

大人の本の作家と子どもの本の作家が交流する。バトルする。新しい書き手が参加する。挑戦する。児童文学の冒険、ふたたび!

特集名		本体価格	定価	判型
2008冬 12号	河合隼雄と子どもの本(1月発売)	952	1,000	B5変
2007秋 11号	石井桃子と子どもの本の100年(最新刊)	952	1,000	B5変
2007夏 10号	動物園へ行こう	952	1,000	B5変
2007春 9号	創作特集	952	1,000	B5変
2007冬 8号	柴田元幸の「飛ぶ教室」的文学講座	952	1,000	B5変
2006秋 7号	ぼぼ まるごと一冊 長新太	952	1,000	B5変
2006夏 6号	プーの森で語り明かそう	952	1,000	B5変
2006春 5号	創作特集	952	1,000	B5変
2006冬 4号	トーベ・ヤンソンのもうひとつの顔	952	1,000	B5変
2005秋 3号	神沢利子の世界	952	1,000	B5変
2005夏 2号	少女小説の知的なくらみ	952	1,000	B5変
2005春 1号	復刊特別号	952	1,000	B5変
年4回(1・4・7・10月) 発売				

ベストエッセイ

日本文藝家協会編。人生の機微に触れる珠玉のエッセイ・アンソロジー!

書 名		本体価格	定価	判型
ベスト・エッセイ 2007	老いたる私たち(最新刊)	2,000	2,100	四六判
ベスト・エッセイ 2006	意地悪な人	2,000	2,100	四六判
ベスト・エッセイ 2005	成り行きにまかせて	2,000	2,100	四六判
ベスト・エッセイ 2004	犬のため息	2,000	2,100	四六判
ベスト・エッセイ 2003	花祭りとパーミヤンの大仏	2,000	2,100	四六判
ベスト・エッセイ 2002	落葉の坂道	2,000	2,100	四六判

光村ライブラリー

教科書で習ったあのなつかしい作品が、今よみがえる。

書 名		本体価格	定価	判型
光村ライブラリー中学校編	全5巻セット	5,000	5,250	菊判
光村ライブラリー中学校編	各巻	1,000	1,050	菊判
光村ライブラリー小学校編	全18巻セット	18,000	18,900	菊判
光村ライブラリー小学校編	各巻	1,000	1,050	菊判

名詩の世界

西郷竹彦著。著者自ら小学校・中学校・高等学校の現場で授業した経験が生きる。

書 名		本体価格	定価	判型
西郷文芸学入門講座	第1巻 第3巻 第5巻 第6巻	2,095	2,200	A5判
西郷文芸学入門講座	第2巻 第4巻 第7巻	2,381	2,500	A5判

漢字ステージ100

小中一貫教育先駆的な教育特区品川区と国語の光村図書が共同開発。

書 名		本体価格	定価	判型
漢字ステージ100	1・2年生	905	950	B5横
漢字ステージ100	3・4年生	905	950	B5横
漢字ステージ100	5・6・7年生(8・9年生)	905	950	B5横

ジュニアコロンブス21

小学生のための英語テキスト。英語を使ったコミュニケーションの楽しさを、子どもたちと一緒に実感してください。

書 名		本体価格	定価	判型
JUNIOR COLUMBUS 21	児童用テキストBOOK1(3・4年用)	524	550	B5判
JUNIOR COLUMBUS 21	児童用テキストBOOK2(5・6年用)	524	550	B5判
JUNIOR COLUMBUS 21	指導書BOOK1(CD3枚・別冊ブックレット付)	4,571	4,800	B5判
JUNIOR COLUMBUS 21	指導書BOOK2(CD3枚・別冊ブックレット付)	4,571	4,800	B5判

新版中日交流標準日本語

中国人学習者のための総合日本語テキストの決定版!

書 名		本体価格	定価	判型
新版中日交流 標準日本語	初級上下巻セット(分売不可)	4,000	4,200	B5判
新版中日交流 標準日本語	初級CD(6枚組み)	3,000	3,150	—
光村図書・人民教育出版社共同編集				

光村の好評ロングセラー。国語教育の至宝と画集。

書 名		本体価格	定価	判型
近代国語教育論体系	全20巻	172,816	181,457	菊判
近代国語教育論体系	増補5巻	43,205	45,365	菊判
画集「野田弘志」		43,000	45,150	B4変

●全国の書店および、弊社HP(光村チャンネル<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>)からオンラインショッピングをクリック)にてお求めいただけます。